

日本海にぎわい・交流海道ネットワーク シンポジウム

開催地挨拶：舞鶴市長 多々見良三



皆さん、こんにちは。

舞鶴市長の多々見良三でございます。

「平成23年度日本海にぎわい・交流海道ネットワーク」シンポジウムの開会にあたり、開催地、舞鶴市を代表して一言ご挨拶を申し上げます。

本日のシンポジウムには、大変天候の悪い中、北は北海道、南は九州から、日本海沿岸の港湾を核とした地域振興に取り組んでおられるネットワーク会員の皆様や、京都舞鶴港の港湾関係者の方等、多くの方にご参加いただきましたことに心より有り難く歓迎申し上げますとともに、本会を本市において開催いただきましたことを、大変光栄に存じます。

我が京都舞鶴港は、昔から海と深くかかわりを持ちながら、発展を続けてまいりました。

平成10年に、舞鶴湾口の浦入遺跡で、幅1m、長さ8mの外洋型丸木舟が発掘され、5,300年前の古きより外洋を介した海上交易がおこなわれていたことが明らかになり、安土桃山時代には、織田信長の家臣であった細川藤孝、忠興親子が築城した田辺城の城下町の港として、更に江戸時代には、北前船の寄港地として、商業を中心に発展してまいりました。

明治時代には、海軍鎮守府が設置され、軍港都市として栄え、戦後は「岸壁の母」に歌われた引揚港として、大きな役割を果たしましたことは、皆さまご承知のとおりでございます。

現在は、関西経済圏の日本海側ゲートウェイとして、国際物流ネットワークの拡大に努めており、昨年4月には、日本海側では有数の5万トン級船舶に対応するマイナス14m岸壁を有する「舞鶴国際ふ頭」が供用開始されたところであり、今後の対岸貿易の発展に大きな期待を寄せているところであります。

さて、私は2月に市長となり、5月に中国・大連市への訪問、6月にはロシア・ナホトカ市の来訪、7月には韓国・浦項市への訪問と、東アジアの諸国との関係強化の機会に恵まれ、それぞれの市長との交流を通じて、“きずな”を築いてきました。

その中で感じましたことは、対岸諸国は日本との更なる交流を期待しているということです。

国内では、3月11日の東日本大震災により、自粛ムードが継続しておりますが、そのような状況であるからこそ、日本海側の港湾が「日本の元気」を発信し、“にぎわい”を創出することが、被害を受けた太平洋側港湾の支援になるものと信じております。

日本海側の港湾が、太平洋側の物流機能の一部を補完、代替し、リダンダンシー機能を発揮したところではありますが、私は本当の支援はこれからだと思っており、先ほど申し上げました対岸諸国との交流を含めて、“にぎわい”の創出に力を注いでいく所存であります。

後になりましたが、本日、ご参会いただきました皆様のご健勝をお祈り申し上げますとともに、日本海沿岸地域の益々の発展を祈念いたしまして、私のご挨拶といたします。

本日はよろしく願いいたします。